



プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月06日 11:36:06

2011年01月06日 11:36:06

入館証番号:

[Empty box for library card number]

入館証番号:

[Empty box for library card number]

Call Slip

<請求票>

Call Slip

SJ900
5
40

<請求票>(控)

書名
資料名: 漢詩と日本精神 (日本精神叢書)
巻次:
著者名: 塩谷温 // 著
出版者: 内閣印刷局
出版年: 1940
大きさ: 15cm
頁数: 127p

資料名: 漢詩と日本精神 (日本精神叢書)

巻次:

著者名: 塩谷温 // 著

出版者: 内閣印刷局 頁数: 127p

大きさ: 15cm 出版年: 1940

所蔵館: 中央

所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンタ

配置場所: 1/75B 中)MB2書庫B

資料ID: 1121927743

一社人自東新	力	事
↓		
一社人自東新	請求	報告
MB1 マイカ B1 アルファベット	原紙	縮刷
MB2 マイカ B2 洋	中	朝
行 1F B1 B2		
多 児 青 1F B1 B2		

切り取り

所蔵館: 中央

所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンター

配置場所: 1/75B 中)MB2書庫B

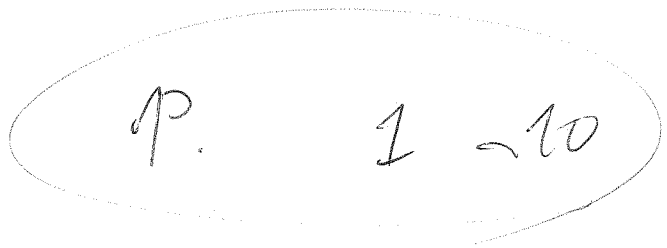
資料ID: 1121927743

請求記号

SJ900

5

40



漢詩と日本精神

一 我が國體と漢學

我が惟神の道は、清く且つ尊きこと、渾然たる璞玉の如きものである。乍併、之を磨いて鑿らかにし、之を大成せしめる爲には、外國の教の長所を攝取せねばならぬ。故を以て、歴代の天皇は、外國の教なりと雖も、我が惟神の道を生し立て、我が國の文化を進めるに足るべきものは、その長所を探り、以て國運を盛ならしめることに、大御心を用ひさせ給うたのであつた。而して最初に我が國に傳へられたものは、支那の文化、即ち漢學、次に傳へられたものは、印度の文化、即ち佛教、最後に傳へられたものは、西洋の文化、即ち基督教を中心とする一般の歐米文明であつた。

一 我が國體と漢學

漢學の根本精神は、孔子の教に在る。由來、孔子の教は、述べて作らずに、専ら堯舜禹湯文武周公等の道を集大成せるものであり、要は堯舜等支那古聖王の發揮せる道を、極めて忠實に祖述せるに過ぎぬ。されば、孔子の教は、支那の精神文化の結晶であり、内は孝悌忠恕、外は禮讓を以て、その基礎とせるものにも過ぎぬ。随つて、その家族制度に立脚せる五倫の教は、また以て我が惟神の道と、一脈相通するものがあつた。

斯くて、應神天皇の朝に、百濟の博士王仁が來朝し、論語及び千字文を献上してからは、漢文を和讀する爲に、倒讀法が發明せられ、一見目を驚かすに足る難解な文字文章をも、流暢な日本語を以て、自由自在に讀みこなすと共に、進んでは、國語をも漢文の形式によつて、見事に綴り得る様になつたのである。その後、我が國が、直接吳國と交通する様になつてからは、益々漢籍が多く傳はり、五經と共に、孝經等も傳へられ、文武天皇の定め給うた大寶令に於て、

論語と孝經とは、大學寮の各經科を通じて、必修の科目とせられ、孝謙天皇は三寶を信じ給うたが、同時に儒教をも尊び給ひ、天平寶字元年には、有名な孝經家藏の詔を下し給うた。かくて漸く漢學が世に行はれるに至つたのである。奈良、平安の兩朝にかけては、遣唐使に従つて留學する者が多くなり、學生には、吉備眞備、阿部仲麿の如きがあり、僧侶には、最澄・空海の如きがあり、入唐して、その文物を傳へると共に、遂に之に中毒するに至つたので、於是乎、和魂漢才の説が起つた。それは「支那の學問は結構ではあるが、之を無批判に取入れてはならぬ。即ち、日本精神によつて再吟味をしなくてはならぬ。」といふのであつた。

由來我が平安時代の漢學は、唐代の學問であり、經學は専ら訓詁を主とせるものであつたが、支那に於ても、宋代に入ると、佛教の影響を受け、學問の傾向が一變して、哲學的研究となり、之が道學即ち性理學となり、朱子學が大成

せられたのである。而して、遣唐使が廢せられて後も宋元の世には、我が國との公の交通がなくとも、僧侶の往來なほ止まず、それ等の人々によつて、朱子學の書物が日本に傳へられた。最初に、朱子の新註を朝廷に御採用になつたのは、後醍醐天皇にましました。後醍醐天皇は、宮中に於て、玄慧法印に命じ、朱子の新註を講ぜしめ給ひ、傍ら、北條氏御討伐の御謀議を凝らし給うた。即ち、建武中興の學は英邁なる後醍醐天皇が、その御政治を、日本の正しい姿に回し給はんとあそばした御企であることは勿論なるも、斬新な朱子學の大義名分論は、日野中納言齊朝、同俊泰、北畠親房、藤原師賢、同宣房・藤房の諸卿を始めとし、多數新進公卿の國體明徴論に、油を注ぎ火を點じた。即ち、建武中興の指導精神の底に、朱子學の新思想の流れて居つたことは、疑ひないのである。就中、親房の神皇正統記の史論の如きは、司馬溫公の資治通鑑と、朱子の通鑑綱目の正統論とに負ぶ所が多かつたのである。

建武中興の一頓挫を來したことは、色々と複雑な原因があつたにもせよ、私をして端的に之を言はしむれば、折角、新進學徒である公卿達の國體明徴論が、唱道せられたにも拘らず、當時の武士達が、學問に暗く、國體意識に自覺めなかつた爲に、結局は、足利高氏の功利主義に誘はれて、私利私欲に走つた爲であつた。論より證據、西南官軍として、孤忠を守つた菊池氏の儒學を見て、思ひ半ばに過ぐるのである。建武中興は、不幸にして挫折せるも、一旦目覺めかけた國體意識は、空しく亡びるものではなく、建武中興が軀となつて、終に、明治維新が出来上つたのである。

二 明治維新の原動力

徳川氏が幕府を開き、文教を興すに及び、漢學、即ち朱子學を採用した結果、今まで地下に潛んでゐた國體明徴の論が、勃然として擡頭するに至り、そ

の急先鋒は、實に水戸義公の大日本史であつた。水戸藩は、同じく三家と呼ばれる紀州・尾州に比べてその祿高が殆んど半分にも過ぎぬ。然るにも不拘、その祿高の更に三分の一を、大日本史の編纂費に充て、義公から十二代かゝつて始めてこの書が完成し、茲に全く、國體觀念が明徴にせられたのである。なほ、義公が湊川の大楠公の碑を立てられた事だけでも、容易の事ではなかつた。當時、大楠公戦死の場所等は、誰も注意を拂はなかつたのであるから、義公が碑を立て、「嗚呼忠臣楠子之墓」と題されたことも亦、實に破天荒の事であり、公の書かれたこの碑面の八大文字は迫力が充分であり、字々活躍してゐる。實に、ここに日本精神の礎が置かれたのであつた。

之と前後して、漢學者中から、山崎闇齋、山鹿素行等の如き、國體學者が起るや、闇齋一派と水戸一派とは、尊皇論を唱へる者が多くなり、就中、闇齋派たる淺見綱齋の靖獻遺言は、山鹿素行の中朝事實と共に我が國體の尊嚴を闡

明し、やがて志士の間にも、亦漸く勤王論が起り、竹内式部、山縣大貳、高山樗牛、蒲生君平の如きは、皆實際運動を以て、流芳千載に及び、頼山陽の出づるに及んでは、日本外史、日本政記の他に、數多の詩歌、樂府を著して、大いに國體觀念を明徴にし、國民精神を鼓舞せるを以て、遂に明治維新の原動力をなすに至つたのである。

徳川慶喜公が大政を奉還せられたことは、實に大英斷であつた。一體、公は何に由つてこの決心をせられたか。即ち、義公の大日本史の精神を繼紹し、之を發揮せられたのである。端的に之を謂へば、慶喜公の大政奉還は、國體觀念の本格的明徴であり、而して、公のこの國體明徴は、遠く天孫降臨の神勅に明示せられてゐる所に則られたのであると共に、また實に水戸學の完成といふべきであつた。即ち、水戸學の國體明徴は、先づ義公の議論に始まり、烈公の實行運動となり、慶喜公に至つて、終に之が完成を見たのである。

斯くて、大日本史の編纂が、非常に人心を刺戟して、日本精神を作興し、國體觀念を明徴にすると共に、幕末に至つては、漢學が諸藩に普及するにつれ、頼山陽・三樹三郎の父子、梅田雲濱、吉田松陰、橋本左内、西郷隆盛等の如き、漢學で養はれた人々が起つて、終に明治維新を作り上げた譯である。

三 日本の漢詩

我が國に漢學が行はれると共に、漢詩も亦作らるゝに至り、その濫觴は遠く天智天皇の朝に在り、懷風藻、經國集等の撰がある。而して既に一千年以上の傳統を有する我が國の漢詩は、その後は渾然として我が國民性と同化して、日本文學史上、閑却し得ない地位を占めると共に、その體裁こそは、支那の形式を模倣してゐるが、思想や用字の上には、能く彼の國のそれを攝取し、咀嚼し、遂に同化して、遺憾なく、我が國民的個性を發揮してゐる。随つて、その

幾分には、所謂和習を混ずるとするも、之を大局から觀察すれば、我が國民的個性が、模倣の域を脱却して、新しく生じた傾向があり、此の點にも亦、我が國民の偉大なる特異性が發揮せられてゐるのである。

抑、詩は志の之く所である。人情、中に發して、言葉に形はれ、嗟歎詠歌して足らず、之を五聲八音に叶へて、自ら五言七言、四句八句の格調をなし、興の昂まる所、遂に自ら手の舞ひ足の踏む所を知らざる、作者自身の樂があるのみならず、その作品に至つては、世の治亂盛衰に關係し、且つ人想の機微にも觸れてゐるので、蓋し人心を動をし、世俗を移すもの、詩より善きは莫い。詩人の多感なる、日本精神の實質に觸れ、その雄々しい姿に接する時には、忽ち發して或は二十字、二十八字の短篇となり、或は數百言、數千言の長篇となり、幾多の血涙と感激との文字を、汗青に垂れてゐるのである。嘗、楠二公を始め、備後三郎、大石良雄、或は金剛山、芳野山、湊川、幾多の忠臣義士と、

その遺跡とは、詩人の胸臆に詠歌せられては、日本精神の宣揚となり、志士の口中に朗誦せられては、國體觀念の明徴となり、以て明治維新の原動力となつたのである。例へば頼山陽、藤田東湖等の詩を讀めば、心の底に勃然として湧き起つて來るもの、是れが即ち日本精神である。

詩こそ心の聲なれば、之を朗吟することによつて、心の琴線に觸れ、之が共鳴によつて、感奮興起すべきである。今や非常の時艱に際會し、日本精神の益々發揚せらるべく、國體觀念の愈々明徴せらるべきの秋に當り、特に、我が精神、我が國體と關係深く、且つ豪壯にして明朗なる作品を、我が日本の漢詩中より撰ぶ所以も、蓋し亦こゝに在るのである。

四 五言絶句

凡そ漢詩には、古體と近體との別がある。律詩と絶句とは、之を近體とい

ひ、唐代に至つてその法則が定められた。近體の古體に異なる點は、平仄を講へると、否とにある。平仄とは、聲の高低、即ちアクセントである。元來、支那語には、四聲の區別がある。之を平上去入といふ。平聲の平らかな聲であるのに反し、上聲は尻上り、去聲は尻下り、入聲はフ・ツ・ク・チ・キに終る促音である。平聲は更に之を上下に分ち、上平・下平といひ、他の上去入三聲を、平聲(上下)に對して、仄(側、即ちかたむく)といふのである。

絶句には、五言と七言との二種がある。全篇は四句より成り、その第一句を起句、第二句を承句、第三句を轉句、第四句を結句といふ。即ち、第一句で起し、第二句で承け、第三句で轉じ、第四句で全體の意を結ぶのである。そして、五言絶句にては、起句と轉句とは押韻せず、承句と結句とのみに、押韻するを正調とするが、起句は押韻するも妨げない。また仄韻を押す例も少くなく、其の外に色々の變調もある。要之、平仄の粘法は、全く律詩と同じく、二